

也、是はくるとうには勝まけなれども、外の札はつゞくものなし、其打さすと云事あり、さすとは一人人物鳥か虫の類を以てふせ置其次の人たゞの札を出すはすてといひて、初手を捨てしまふ也、劔の札杯にては有ととも取事ならず、今一人は手にある處のうんを馬までの繪の付たるを以てさす也、向ふの人第六番めの馬をさせば、此方にて其より上の五ばんめのこしをさして取也、其順にてうんをさせば、是に紛もなし、かやうにしてみな取じまひ、壹はん多く札をとりしもの勝となる也、其札の取方さし方に、大に上手下手ある事也、亦最初一枚取、おくれもしうんを馬までの札なれば、あまりよき物ゆへ益なき事なれば、又かはより五枚づゝも取て切直し、其中一枚をく事も有、又棒の五丸の五丸の四棒六にて取也、又棒の九丸の四きき取所也、

又古き書付添一枚有之、すんうんそうたきり馬虫、右の外はぼうはあれども、數多き方へとり申候、丸きものは數少き所方へ取申候、残りをおきと申候、おきに御座候むしを持候者か打出し申候を、きはたがひにふせ候てさし申候、おきをたがひにさし候ても、人の付候かたへ取申候人にて、をきにて御座なく候へば、丸きものにて、もぼうにて、其時々のおきの方へ取申候、何れにても繪のつき次第、たがひにさしにてせうぶいたし候、

〔和漢三才圖會十七擲七擲七〕

按擲蒲其製古今不同、今所用者、本出於南蠻矣、用厚紙作之、外黑内白而有畫文、青色名巴赤色名伊

圓形名於半圓名骨之四品、各十二共四十八枚、其畫一則蟲形名豆二至九畫數目也、十則僧形即名

十一騎馬即名十二似武將名岐、其名目亦蠻語矣、

〔桂林漫錄上〕清人詠歌

寛政庚子歲安房國立澤、南京ノ商船漂著ス、○中 彼人難商ドモ出船ノ後、假小屋ヲ取り拂ヒタ